論　文　要　旨

氏　　名　　山本　祐子

論文題目　　マーク・トウェインによる名脇役の女たち
　　―文学における女性表象とアメリカ論考

論文要旨

本博論（単著）の目的は、約 1 世紀にわたるマーク・トウェイン批評にあって絶えず軽視され非難を浴びてきた女性登場人物に光を当て、トウェインの女性描写には重大な意味があり、さまざまな情報が隠されていたことを提言し論証するものである。これにより女性描写に関する定説やフェミニズム論から脱却し、独創的な視点を提供したという点で、トウェイン研究のみならずアメリカ文化・文学研究における意義は大きいと思われる。

マーク・トウェインといえば、アメリカ人男性を描かせたらアメリカ随一であり、ハックルベリー・フィンをもってしてアメリカ人（男性）の原型を呈したとまで評された作家である。だが女性を描くのだけは苦手で、そこが彼の唯一の欠点と見なされてきた。彼の描く白人女性たちは、信心深くて母親的な中年女性か脆弱で可愛らしいヒロインの 2 タイプしかなく、ヴィクトリア朝的女性像を踏襲するだけの平板で凡庸な描写に終始していたからである。またトウェイン文学から建国期アメリカの自由や独立心を、つまり男性的な要素を読み取ることに意義を見出す風潮にあって、トウェインのヴィクトリア朝的な女性たちは小説に花を添えるだけの飾りにしか見えなかったのである。

こうした事情から、従来女性登場人物の研究は取り残され、女性登場人物を中心とした研究書も殆ど出版されなかった。日本においては本書が初めてとなる。作品の女性研究が進まなかった理由は他にもある。1970 年代にフェミニズムの大きな波が押し寄せると、トウェインの女性描写は差別的とされ、さらに激しい非難にさらされたからである。彼はステレオタイプ化された上品で従順な女性像を繰り返すことで、社会の求めるジェンダーロールを徹底し、そこに女性たちを閉じ込めてしまったと考えられたからである。フェミニズム的視座は近代女性研究の主流を成しており、これをもとにトウェインの女性の扱い方を批判・否定する議論は強化され、定説となっていった。この定説を覆し、つまりフェミニズム的視座の限界を提示し、女性登場人物が存在する意義を見出したのが本論文である。

そこで本論文の前半である第 3 章までは、トウェインの女性表象すなわちステレオタイプ化された女性描写を詳解し、それらには豊富な文化的コンテキストが含まれていて、多元的な視野を提供していたことを論証するものである。これまではフェミニズム偏重の傾向にあってトウェインの女性表象は差別的と糾弾されてきた。だが表象とは本来ヨーロッパやアメリカの文化的・歴史的背景をくみ取って醸造されてきたイメージ像でありシンボルでもある。この点から女性表象を読み解くことにより、19 世紀のアメリカを突き動かし

てきた思潮や背景が見えてくる。

第 1 章で取り上げるジャンヌ・ダルクも実に豊富な文化的コンテキストを含んでいた。トウェインはいつも男性の主人公ばかりを扱っていたが、ジャンヌ・ダルクという女性にだけは例外的に強い執着を示し、彼女を主人公に据えた歴史小説『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想』を匿名で出版した。だが彼にとって唯一の女性主人公ジャンヌは実に陳腐でセンチメンタルに造形されていたのである。というのもジャンヌは可憐で心優しい少女であったことが強調され、この聖なる乙女がイギリス軍によって迫害され処刑される様子がひどく感傷的に語られている。無垢な乙女が迫害される（あるいは殉教する）というのは感傷小説やゴシック小説で繰り返されてきた筋書きで、それらに登場するヒロインたちは「迫害を受ける乙女」あるいは「悲劇のヒロイン」という女性表象として定型化されていた。つまりこの作品は古典的な女性表象をなぞっただけの小説と映り、躍動感あふれるアメリカ人（特にアメリカ人男性）を描いてきたトウェインには相応しくないと考えられ、近年まで顧みられることはなかった。しかしジャンヌ・ダルクは、ヨーロッパの聖女伝承や叙事詩伝統を吸収しつつ、近代西洋諸国を席巻した偶像文化を背景にして形作られてきた女性表象であった。そしてトウェインはこの女性表象を一種の記号として利用し、そこに集約されていた社会的・文化的思潮を読者に伝えていたのである。ジャンヌは時代の象徴でありシンボルであったことを認識すると、その先には民衆をナショナリズムへと駆り立てようとする建国期アメリカの国家的戦略までが見えてくる。

第 2 章では、「悲劇のヒロイン」と並んでもてはやされた女性表象「早世の乙女」に論を移した。19 世紀半ばになるとロマン主義の高まりにより、はかなく散った乙女をモチーフとしたエレジーや絵画が流行し、量産型版画や挿絵あるいは雑誌記事といった大衆文化においても「早世の乙女」は盛んに取り上げられていた。こうして「若い女性と死」あるいは「若い女性と死を悼む行為」は密接に結びつけられ、実生活においても身内の死を悼むのは女性の役割とされていたのである。強調したいのは、トウェインの描く「早世の乙女」が当時の死生観や服喪（ふくも）文化を映し出す鏡であったということである。19 世紀とは死体にたいする感受性が前世期と比べて大きく変化した時期でもあり、アメリカ人が死体にたいして近代的な眼差しを持つようになる転換期にあったことも、トウェインの描く「早世の乙女」から読み取れる。そしてトウェインがなぜ死体を数多く扱ってきたのか、不可解とされてきた彼のグロテスクな趣味を理解する鍵も「早世の乙女」にあった。

第 3 章では、前章で取り上げた「悲劇のヒロイン」を心理学研究の見地から考察した。トウェインは実をいうと「記憶」を語ってきた作家であったともいえる。彼の代表作『ハックルベリー・フィンの冒険』は、舞台となったミシシッピ河湖畔の生活から登場人物やエピソードにいたるまで、彼の少年時代の「記憶」を下敷きにして創り上げたものであった。ところがトウェインはこの作品の続編「ハック・フィンとトム・ソーヤーのインディアン捕囚記」に取り掛かったとき、意外なことに、溢れんばかりの「記憶」の泉に手をさしのばすことを止めてしまう。「記憶」を語る作家は、「記憶」とはそもそも何であるのか

という疑問を抱き、その思索を作品に反映させてしまったのである。換言すれば、物語におけるハックとトムはフロンティアの荒野をさまようなかで、五感とともに「記憶」を失い、人間としての自我を崩壊させていく過程が描き出されていたのである。それは、19 世紀に萌芽した深層心理学の影響を受けて、意識下の自己を探求するための実験的な試みでもあった。ところがトウェインは、この作品以降、「記憶」と自我あるいは無意識という問題を作品で扱っては、途中で投げ出してしまうようになる。そして頓挫した未完作品群では、必ずといっていいほど、「悲劇のヒロイン」が登場するのである。完成することのなかった作品において、いわば私的な創作活動において、トウェインは自己という問題とどう向き合っていたのか、そしてそこに投入された「悲劇のヒロイン」が何を表していたのかを考察した。

本論文後半では、トウェインの死後 100 年目にして初めて解禁された未検閲の自伝原稿や備忘録、あるいは未発表短編や未完原稿といった膨大な未公開資料を精査し、19 世紀の女性たちは家父長制やジェンダーロールに必ずしも収まって暮らしていたわけではないこと、ヴィクトリア朝的価値観では割り切れない現実や文化が広がっていたことを明らかにした。しかも女性たちのこうした実態を当時の社会はある程度容認しつつも、公の記録には残さないという文化・良識があったことを指摘したのも、本論文の意義の一つである。つまり公表された文学作品や文書には残っていないが、19 世紀の女性に我々現代人の知らない素顔があったことを突き止めたのである。この隠されてきた女性たちの素顔と照らし合わせながら、トウェインの女性描写を考察するとき、さまざまな情報が浮かび上がってくる。トウェインは万人受けする画一的な女性表象を取り込むことで、女性たちの何を隠してきたのか、またなぜ隠さねばならなかったのかが浮き彫りとなるからであると論じる。

第 4 章では女性たちと決闘文化の関係を明らかにするために、トウェイン作品の女性登場人物とそのモデルとなった実在の女性たちを比較した。小説における女性たちはみな社会的にも肉体的に非力で、心優しく、子育てや宗教あるいは単に結婚相手を探すだけの退屈な人生を歩んでいたように見える。だがそれは、女性たちの生活におけるほんの一部分に過ぎなかったのである。実際には南北戦争以前の南西部では、暴力と侮辱には戦いをもって報いて汚名をそそぐ慣習である「決闘文化」が根強く残っていて、男性のみならず女性の精神性にまで大きく影響を及ぼしていた。つまり当時の女性たちは我々が考える以上に暴力的で攻撃的でなければ生き残れなかった。その現実をトウェインは小説においてあからさまに描くことはしない。だが 19 世紀の読者にだけは、つまり女性たちの現実を実生活において見知っている同時代人にだけは察することができるよう手がかりを残しつつ、女性たちを描いていた。おとなしそうな女性登場人物たちも、ある状況化では一転して暴力的となり、武器をもって立ち向かっていたとなれば、我々の見方も一変する。当時の読者には見えていた現実と照らし合わせて彼女たちを読み直すとき、そこには「伝統的な女性像」から大きく外れた姿が見えてくる。

第 5 章では、女性の話し言葉（ヴァナキュラ）について詳細に考察した。トウェインは、

白人男性と黒人の話し言葉を作品化し、それをアメリカにおける文学的伝統の一つにまで昇華させた作家として知られている。ところがそのトウェインも、白人女性の話し言葉にだけは手を出さなかった。実は文学における女性表象とは、外見や性格的な描写だけで形成されるものではなく、作中で語られる女性たちの言葉によっても画一的な女性表象は固められていった。それゆえトウェインも当時の道徳規範にならい、女性たちには道徳的で女らしい会話だけをさせて彼女たちの言葉遣いを制限することで、道徳的なイメージを塗り固めていかねばならなかった。では女性たちは実際にはどのような言葉遣いで、何を語っていたのか、手紙や日記に何を書いていたのか、実は殆ど分かっていない。言語学研究においても女性の話し言葉は看過されてきた分野であった。ところが近年公開された『マーク・トウェイン完全なる自伝』を見ると、トウェインは女性たちの私的な手紙や日記を収集し、彼女たちの偽らざる赤裸々な言葉を記録していたのである。だがそれらの殆どは公表されずに埋もれてきた。女性は言語まで抑圧されていたのだ。そこで本章では、当時の白人女性たちが実際に語っていたと思われる生の声を検証し、それが小説などの公の媒体ではどれほど校閲・削除されてきたか、あるいは体裁のいい台詞へと改変されていたかを考察することで、知られざる女性たちの現実やタブーを明らかにした。

第 6 章で扱うのは「笑わない女性」である。これもまた頑なに繰り返されてきた女性表象の一つであったことは全く知られていない。トウェインは「ユーモア話」の名手としても有名であるが、彼のユーモアを妻のオリヴィアはよく理解できなかったという逸話が残っている。こうした話は好んで取り上げられ、女性はユーモアを理解できないという言説が広まり、「笑わない女性」という表象が定着した。当時出版されたトウェイン作品の挿絵を検証すると、歯をむき出しにして大笑いする女性の姿は全く描かれていない。女性が「ほほ笑む」ことには好意的であったが、「笑う」のは下品だとして厳しく制限されていた時代背景が読み取れる。そもそも当時の笑話(しょうわ)伝統は男性の専有物とされ、これを女性たちは楽しむことも笑うことも許されていなかったと文学批評は断じている。ところが『マーク・トウェイン完全なる自伝』の出版により、現実の女性たちはユーモアを理解していたし、それで大笑いして楽しんでいたことが分かってきた。ただこうした女性たちの姿は公には隠され削除されていた。一方でクラブや晩餐会などで非公式に語られていた「ユーモア話」には女性を主題として扱った作品も多く、そこにいる女性たちは歯をむき出しにして大笑いし、無様(ぶざま)な姿をさらけだして笑われていた。だが、笑う女性は隠すべきという社会的圧力から、こうした口承笑話も封印され、次世代には伝えられなかった。これらの貴重な資料を発掘して口承の笑話伝統にまで論を進めると、当時の笑いという問題から知られざる女性の文化まで明らかになる。

第 7 章で扱うのは『ハックルベリー・フィンの冒険』におけるミス・ワトソンとダグラス未亡人という女所帯の二人の女性である。19 世紀アメリカといえば強固な家父長制社会であったと思われているが、実際にはミス・ワトソンとダグラス未亡人のように家父長制の枠から外れた女性たち、つまり女性だけで暮らす世帯も少なからずいて、トウェイン作

品にも数多くみられる。つまり家父長制から外れる女性たちの存在については看過されてきた研究分野であるが、共同体の一部を占め社会問題にまでなっていたのである。しかしトウェインは相変わらずそうした女性たちの私的な事情に深入りはしない。ミス・ワトソンとダグラス未亡人は一見すると女性表象をそのままかたどったような人物で、平穏で家庭的に暮らしていたような描写をされている。しかしながら、第 4 章ですでに述べたようにトウェインは当時の人間には分かるような手がかりを残し、読者に推測させるという手法を使っていた。当時の読者が共有していた常識や現実を参照しながら彼らにとって見えていたものを再現するとき、女所帯の現実やあやうさが見えてくる。ミス・ワトソンとダグラス未亡人が屈強な男奴隷ジムとの間で危険なパワーバランスに陥っていたことや、従順で気のいい奴隷ジムがなぜ逃亡という大罪を犯すに至ったのか、そういったことも明らかになるのである。